

## 書評

松井利彦著

### 「近代俳論史」

佐々木啓一

「現われるべき書物が現われた」——これが松井氏の著書を拝見した直後の私の感じである。俳論を手がけている私は、松井氏から数々の助言を蒙った。今、著書を手にしてみると、それらの助言が悉く整理された膨大な資料を充分踏まえての発言であることを今さらのように知つて、その博覧強記ぶりに驚愕している次第である。勿論、俳壇の知名人から、俳句関係の資料について、毎日のように照会があると聞いていたし、またその種のものを見つけたこと

もある。従つて助言の一切について全幅の信頼を抱いていたのであるが、著書を手にして完全に大声一喝された感じである。

氏は、俳論史に先立つ、俳論に關した資料の蒐集を昭和二十七年頃から始められ、

書評 松井利彦著「近代俳論史」

それに平行してその目録を分類、整理されて、昭和三十九年迄に約四万数千項目を集録、その間約六万冊の雑誌を整理、資料で蔵書となつた俳句関係単行本は一万冊を越えている。

氏が、俳論の資料蒐集を思いたれたのは、敗戦後間もない頃、即ち大学在学中のことで、卒業後生涯の仕事とすることを決意されたとき及んでいる。当時、著名な歌人の一人であり、近代短歌史研究の權威であつた小泉三三氏のもとを訪ねられた氏は、小泉氏から俳句関係の結社誌を可能な限り集めて、徹底的に読破してゆくことを教わられたようである。それから氏の基礎資料の蒐集が始まつた。文字通りの東奔西走、そしてその間の幾多の苦勞は誠実な研究者

なら総てが嘗める貴重な体験の連続である。勿論、蒐集とその整理だけでも価値ある業績にちがいないが、氏は加えるにその道程において最大の權威者・指導者との出会いをもたれたということである。著書の序文に筆を執られた高木市之助、吉田精一両先生である。研究方法、研究態度の基本的な分野は、両先生から学ばれたと聞いている。そして氏の業績の一端は、昭和三十年頃から両先生の認められるところとなり、東京堂の「近代日本文学辞典」編集への参加、筑摩書房の「現代日本文学年表」の俳句に關する部分は、一切氏の担当、河出書房の「現代文学論大系」の「評論年表」の「俳論」の部分は氏の担当、というように、いよいよ俳文学の領域にも足跡を拡大された。その間俳文学会にも論文及び発表を示された。

一方、氏は、実作、指導の分野においても俳壇の有力者であり知名人である。吉田精一先生は、氏の著書の序文において「松井君はたんなる研究者というにとどまらず、また長年実作の経験があり、在住している岐阜では、多くの門下を指導している。」

と述べておられるのをみてはわかるが、このことは一方で学会での有力メンバーの一人であることも意味する。今、連載の形式で角川書店発行の俳句総合誌「俳句」に「明治俳句評論年表」を、俳句研究社発行の同類誌「俳句研究」に「昭和俳句評論年表」を執筆中で、その他の有力な結社誌にも、作品論、俳論の健筆を揮つておられる次第である。また、山口誓子の主宰する「天狼」の同人、沢木欣一の主宰する「風」の同人として俳壇の啓蒙と後進の指導とに尽力しておられるのである。

さて、氏の名著「近代俳論史」について、未見の人もあると思われるので書評を兼ねて紹介させていただきたいと考える。書評をお引き受けした最初、研究の上で氏の身辺に在ることでもあり、著者の優れている点についても判つている積りでいるから、単なる内輪ぼめの程度の紹介と批評に終つてはならないと堅く自分を戒めて来たのであるが、愈々個々に調べ挙げてみると、遅疑逡巡の余地がない程、内容については完璧であることを確認してしまつて書評を記

す自信を喪失してしまつた次第である。ともあれ、せめて紹介の勞ぐらいはと思ひ直して以下に記す段に相成つたのである。

まず著書に先行する「俳論史」なるものがあるかどうかの点であるが、氏の発言及び吉田精一先生の序文を参照すると、大森桐明の「明治大正俳論史」が唯一のものでさうである。その点からも著書が殆んど未開拓の領域の礎石を築かれたことになり、さらに「俳論史」のあり方を学界に向かつて提示されたことになり、俳文学の關係分野は勿論のこと、特に近代文学の各分野の研究に、氏の著書における業績が充分に答えて呉れるものを包蔵していることを確信しているのである。

ところで著書は、「俳句シリーズ・人と作品」全十五巻の別巻の一冊である。巻頭に写真による俳句關係誌及び俳人の原稿の一部を、それぞれ時代順に紹介、八頁を使つている。この中には写真を通じて初めて見るもの、入手困難な書物の多数が掲載されている。続いて、「はしがき」「目次」そして「近代俳論史」は、明治篇(約二二

〇頁)・大正篇(約一〇〇頁)・昭和篇(約二五〇頁)の三篇にわかれたれ、「あとがき」で終つてゐる。各篇それぞれ大きな項目にわかつて、「明治篇」十七章・「大正篇」十一章・「昭和篇」二十五章から構成され、各章さらに小項目にわかつて具体化され、細分化されている。

最初の「明治篇」から目次に即し要点のみにしぼつてみてゆくと、「明治十年前後・二十年初期」の第一章からはしまつて第七章「新傾向論の分裂」迄は次のようにみることが可能なのではなからうか。

「明治十年前後」の冒頭で「開化後の俳壇で文芸的な課題が浮び上るのは明治十年前後で」と述べて俳諧の「風雅」と「実用」の両面性を豊富な「俳論」の生資料に一々当りながら、俳諧が風雅観によつて近代化の前に辛うじて日本的な命脈を保ち得たことを説いておられる。特に「滑稽風雅新聞」(明治10・11年)の仮名垣魯文の風雅論は、単に俳論の分野だけの問題ではなささうである。「改暦」では、明治五年十二月三日を以て明治六年一月一日とすることによる

季感の混乱が、かえつて現実を見直す契機となり、また発句の独立という傾向を強めてゆく一方、連句の頽勢に拍車をかける一因になつたというところで、「改曆」を、文学、少くとも直接影響を生じる俳論史・俳句史で問題にしたことは皆無に等しく、氏の炯眼が文献資料を充分駆使し得たことを示していると共に、氏の着想の独自性を如実に証明している部分ではなからうか。

「俳諧教訓派の成立と衰勢」では、この派が種々批判されながらも、明治初年の欧風偏重からの脱皮と日本的なものの確認への足がかりを果した積極的な面での意義を打ちだしておられる。「国詩改良論とその周辺」は「新体詩抄」の序文、坪内逍遙の「小説神髓」の引用等、短評否定論を俳壇がどう受けとりどう対峙していつたかが問題にされ、特にそれを契機として「俳論」の本格派が出現し、俳句の革新が説かれ、新しい文学としての俳句が検討され始めたことを述べておられる。また「文学」の文字の見えた最初が「雅俗日新録」（明治8年9月）であるとしておられる点も精緻の一言に尽

きる。「紅葉と談林」では、紅葉の俳句体験と「秋声会」のことが述べられている。

第二章「癩祭書屋俳話」以下「芭蕉雜談」「写生の導入」「写実的作品の価値づけ」「蕪村尊重」「俳句拡張論の後退」「平淡の追究」に至る各章は、子規及び子規に対する俳論の集大成の観がある。ここは単にスベースの点からではなく、明治篇のなかで、氏が最も情熱を傾けられた章ではなからうか。貴重な資料を公開しておられるところは勿論、資料の配列と論考に異状なほどの情熱を感じるのである。子規の「芭蕉雜談」にみる芭蕉論と、その流出としての子規の文学観は「発句は文学なり。連俳は文学に非ず」の発言に充分反映している。氏はこの点をとらえて「発句の独立」と「連俳非文学説」の意義を正当化するものだとみておられる。さらに「知識に対する感情——制作者の感情を表現するものこそ文学である。」とか「発句は完全に『個』の芸術の立脚点をもつ」という氏の解説の仕方には、実作者としての情熱の片鱗が窺えるのである。「俳句」なる名称の統一的決定的役割

を果したのを子規とみるのは妥当であろう。「蕪村尊重」では、子規の「俳人蕪村」を通じて写生説、平淡追究の原理的な面についての変化を述べ、子規の病床生活が子規の表現上での位相を変えたことについて詳細に追究しておられるあたりは、氏の面目躍如たるものを感じるのである。「子規俳論の継承」「碧梧桐・虚子の対立」「虚子の創作体験」「碧梧桐の新傾向論」「無中心論」「新傾向の分裂」では、特に「虚子の創作体験」に注目すべきものがあ

る。虚子の小説家志望の一件と「ホトトギス」における漱石の活躍との相互関係が、多くの俳論の資料でかなり関心をもてるような追究をやつておられる。「新傾向論の分裂」では井泉水の俳論の要約が「層雲」を資料として器用に処理されて一目瞭然の感がある。

さて、「大正篇」の第一章は「守旧派理論」からはじまり、「虚子の俳壇復帰と新傾向」「新傾向論の展開」「虚子の『主観尊重』」「描写の尊重」「大正中期以降の新傾向」「大正末年のホトトギス内部の新動

向」などとなり、氏は「虚子の俳壇復帰と新傾向」の中で、虚子の復帰理由の一つに新傾向の俳句が十七音季題趣味の破壊をもたらしたる根源を小説への近寄り過ぎにあつたとみて、さらに小説との断絶の徹底が大正期の作品・俳論を大きく特色づけるという言及の仕方は、氏の俳論史を中心とした多年の研鑽の一端であると考ええる。「虚子の『主観尊重』」では、虚子が大正期の趨勢として作家の個性的な面を重視する主張が、近代的な傾向を創り出すという本質的な点に触れておられるのであつて、この辺の考え方が、秋桜子、草田男らに大きく働きかけるのだと書かれている。この点草田男の場合「昭和篇」の「新興俳句に対する反駁の動向」「人間探求派の主張」で詳細に触れておられるのであるが、史的意義づけとしてこの部分は比較的重要に考えるので、俳論以前の問題であるかもしれないが注の部分に詳述して欲しかつたと思う。「大正末年の『ホトトギス』内部の新動向」は、誓子、草城、秋桜子という当時の若手作家の自覚的な意図に立つた消息が豊富な

資料と直接聞き得たところを織り込んで適確に究明されている。次の「昭和篇」の第一章は「花鳥詠論の提唱」続いて「プロレタリア俳句とその周辺」「自然の真と文芸上の真とその周辺」「新興俳句」「新興俳句運動の展開」「詩」意識の革新」「人工素材の開拓と構成手法」「無季俳句の肯定」「新興俳句に対する反駁の動向」「イデオロギー的傾向をもつリアリズムの提唱」「戦時社会と俳句」「人間探求派の主張」「戦時新体制への協調」「闇黒時代」「終戦から第二芸術論まで」「第二芸術論」「第二芸術論」への反駁」「俳句性の探究」などである。この辺になると、他氏の昭和俳句、新興俳句の研究書も比較的多く眼に触れるが、「俳論史」の立場から氏のように先駆的業績の数々を充分消化した上で、新資料と直接談話の内容を随所に示して完璧なまでに解説を加えている点において、私などが妄評を加えるべき余地は残されていない。

「人工素材の開拓と構成手法」の章は、俳論と俳句理論の両面から最も私に関心を

与えた部分である。即ち新興俳句運動の旗頭である誓子の俳句観及び俳句理論の核心がここに集約されている。再び繰り返すようだが、氏のこの解説は、俳論関係の活字の資料を基礎に、直接の調査研究の膨大な資料の裏付けがあつてのことであることが私にもよく理解できるのである。素材面での茂吉の短歌から誓子の俳句への継承の過程、感覚的把握の方法の草城からの受容関係、俳句の構成方法と、誓子自身理論的根拠として唱えている写生構成理論と写生構成主義者としての自負が、史的、系統的に頭にはいつてくるように論じられている。「戦時社会と俳句」では、戦争と俳句の問題について、最初に意見を公にするのは誓子であるとっておられる。つまり誓子が、戦争は無季新興俳句で詠うべきだとして戦争を自らの俳句の世界から遠ざけた。これに対して草田男は、積極的に戦争を自らの俳句の中に撰取した。ここに戦時社会を背景として草田男的な俳論が形成されてゆくのである。しかも新興俳句運動における「如何に生きるか」の問題の追究は、草田男の言

うような国家、社会という「全」に帰一すると言ふ追究の仕方ではなく、社会現実を是認した上での追究であつて、誓子が自己の俳句世界から戦争を除外した言葉などが、かなりな抵抗を秘めた発言であつたと解説しておられる。この説については、誓子の俳論から質的に一応賛成できるのであるが、今少し資料を示していただき、他章、例えば「闇黒時代」と連関を保つて、氏独自の見解を開陳されてもよかつたのではないかと考える。もつとも出版社側が相当部分について氏に無理な制限を強いたとも考えられるが。「人間探求派」及び「人間探求派周辺」では、戦争という悲劇的な現実を通して俳壇が自らの後進性を脱皮した運動、それが「人間探求派」の運動であつたとしておられる。勿論、氏の史観に立つた広い視野と注意深い分析が窺われて優れたものであるが、解説の論究そのものに稍微視的傾向がみられるのではなからうか。「闇黒時代」では、誓子・秋桜子・虚子の戦争末期における俳論を引用して、俳句の自主性を守り抜こうとする意志を窺うことができ

るとしておられるが、俳壇の底を流れる抵抗精神を通してこれほど三大俳人をくつきりと浮き彫りにした章はないと考える。なかでも誓子の態度は微動だもせず「激浪」の編輯後記（昭和19年12月）及び「俳句研究」（昭和20年7月8日）の俳論では、誓子の厳しい態度の核心に氏が触れておられるところ、氏自身の誓子に寄せられる傾倒、凝視が窺えるのである。次に戦後の「第二芸術論」及び「第二芸術論への反駁」の章であるが、氏自身桑原武夫から直接聞きだされたことが骨子になつていたので、結社誌並びにその俳論からの孫引を通じての見解とは質的に全然異なつていふことを感ずるのである。即ち論証の過程は、厳密周到で、右顧左眄の一端すらみられない。章末の一〇〇項目にわたる関係文献資料の紹介は、質量の両面にわたる豊富さを示すと共に、これら文献の中には、比較的新しいものについても現在かなり稀覯に属するものさえあり、しかもこれに関係する資料は出版社の都合で相当部分掲載できなかったと聞き及んでゐる。ここでも氏は誓子が逸早く反駁した

ことを取り上げ、しかも誓子の反論の前に、俳句の独自性を無視して散文の基準で俳句を律しようとしたことを桑原武夫自身反省している部分の解説は見事である。秋桜子・草城・三鬼・不死男・草田男の反論についても引用と解説があるが、氏は章の終りの部分で、戦後の俳壇は「第二芸術論」によつて新しい出発をもつたこと、しかも見失つていた問題意識を意欲的に俳論の課題として取り上げ得たことを「第二芸術論」の俳論史上の意義として認めておられるところ、本章は特に俳論のみならず、戦後文学全般を通じて数々の重要な課題と研究とを紹介し得たと考える。終章「俳句性の探究」では誓子の「天狼」を中心とした俳句性の探究をとらえ、この俳句性に俳文学者も参加するに及んで、氏は「実作者以外の純評論家によつてなされたということも、俳論の主体性の獲得という点で画期的なことであつたといつてよい。」と結んでおられるが、この言葉を通じて、氏自身の俳論史の未来の見取図を描き得たことになり、それ故にまた氏自身の俳論史研究の方向の

正しさを確認し得たことにもなる点、注目できるのである。しかもこの章で俳論史を一応終えられたことの意義も理解できるのである。

序文で高木市之助先生が述べておられる助言を生かされたことは、氏の「あとがき」が如実に示している。即ち「私自身が顔を出すことを排した。これは俳論史という立場から意識的にとつたものである。」とか「俳論史は、俳句史、俳壇史と範囲を異にして成立つものである。」という考え方は、著書の業績にさらに価値を附加するものと思ふ。

最後に、この大著に対して、加えるに学術誌における書評として卒爾の言を弄したことをお詫びし、著者松井氏に改めて敬意を捧げるとともに、明治・大正・昭和にわたる三代の「俳句史」の刊行の一日も速やかならんことを願う次第である。

(B6判)製函入・写真八頁・本篇五六三頁・昭和四十年八月二十五日刊・一、二〇〇円・東京都千代田区西神田二の二九 桜楓社)

○本学会では従来から会費を納入していた場合、お申し出のない限り領収書を発行しておりませんでした。今回から誌面に一括して会費納入者、金額、納入年度を掲載することになりました。本号には昨年十二月から本年四月に納入していただいた分を掲載しました。次号は五月以降の分を掲載します。(学生会員を除く)

- (十二月) 山田容子 東辻保和 中溝郁子 種田滋 磯田弘道 六百元 40年度分・水谷礼治郎 榎野広造 千二百円 39~40年度分・中谷紀夫 千六百元 38~40年度分 橋本四郎 三百円 40年三、四期分
  - (一月) 木村真知子 六百元 39年度分
  - (二月) 中嶋宏司 六百元 39年度分・横地欣也 千円 38~39年度分・浅野達三 二千円 39~42年二期分
  - (三月) 東陽一郎 六百元 40年度分
  - (四月) 塚田満江 六百元 40年度分
- 次号は、九月の発行の予定で、安田章、佐々木啓一、本田義寿氏等の論稿を用意しております。

昭和四十一年四月二十日印刷  
昭和四十一年四月二十五日発行  
定価 百二十円

論究日本文学 第二十七号

編集兼 立命館大学日本文学  
印刷所 森 本 修

御所ノ内中町五〇

中 村 勝 治

発行所 京都市上京区河原町通  
広小路西入ル

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾円  
会費 六百元(卒業生)  
五百円(在学生)

京都市西陣局区内  
河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内  
立命館大学日本文学会  
振替 京都三三八三番